

1920年代のアメリカ小説

——「失われた世代」の作家達を中心に

松山信直

ある歴史的に限られた時代の文学の特色を語ることは、その時代が文学史的観点から定められたものでない限り、常に、過大評価、単純化、歪曲などの危険をはらんでいる。というのも、文学とある特定の時代、或は、社会とのつながりは、決して単純ではないからである。けれども、1920年代の場合、第一次世界大戦という異常な歴史的イベントの直後であったため、文学の中でも社会と比較的密接につながっている小説の重要な一面は、この戦後の時代と直接的につながるものが多かった。「失われた世代」の作家達の小説などは特にそうだった。

20年代の半ばに当る1925年をみてみよう。この年は20年代のアメリカ小説の動向を俯瞰するのに恰好の年である。(年表参照) ようやく老いはじめた Theodore Dreiser (1871—1945) は、10年ぶりに長篇小説の筆をとって、粘っこい例の文体ながら、彼自身の代表作となると同時に、アメリカ自然主義の一つの頂点となった大作 *An American Tragedy* を出版している。近代的都会及び産業資本主義社会の諸現実と、その環境のもとでうごめく人間の生態をとらえてきた Dreiser の自然主義文学は、1890年代のアメリカ自然主義文学の胎動をうけついで以来の活動を、この作品で一応完結する。

一方、自然主義の執拗な現実直視と息苦しいまでの細部描写の積重ねにたいして、素材そのものを精選し、もっと精緻な技法を重んじる小説の芸術性に腐心する一群があった。Henry James (1843—1916) の流れをくむ Edith Wharton (1862—1937) は、1920年に出版した *The Age of Innocence* 以来、さしてめざましい活動をしていなかったが、彼女の後輩ともい

える二人の女流作家 Ellen Glasgow (1874—1945) と Willa Cather (1873—1947) は、1925年には、*Barren Ground* と *The Professor's House* をそれぞれ出版している。Virginia と Nebraska の違いはあるが、二人は特定の地域に住む人々を素材として精妙な芸術作品をつくりあげてきた。二人の作風は伝統的で地味ではあったが、扱いなれた素材を手がけるすぐれた文章や深い想像力のきらめきは、50才を過ぎて枯れた味をしめしてくる。

この二人とほぼ同年配で、すでに1919年の *Winesburg, Ohio* で作家としての地位を不動のものにしていた Sherwood Anderson (1876—1941) は、長篇小説 *Dark Laughter* を発表している。短く単純で新鮮な文章を駆使する story-teller として、彼は地方人を素材にしてすぐれた短篇を書き、挫折感、孤独感等の病的な傾向へと向ってゆく個人の精神内容を、当時漸く流行してきた精神分析をとり入れて描写した。

Anderson の試みた新しい文体を、理論の上でも、また、実践の上でも更に極端にまで押し進めていた Gertrude Stein (1874—1946) は、1912年くらいパリに住んで、James Joyce (1882—1941)、Ford Madox Ford (1873—1939)、Ezra Pound (1885—) などと共に前衛文学を押しすすめていたが、1925年には自分の家族の年代記でもある *The Making of Americans* を出版している。

これら50才前後の作家達にまじって、40才になったばかりの Sinclair Lewis (1885—1951) は、1920年の *Main Street*、1922年の *Babbitt* の成功につづく作品、医学者を主人公にした

Arrowsmith を発表している。彼の手堅いリアリズムを基調とする諷刺は、まだこれから数年先まで続き、彼の作品は殆んど毎年ベスト・セラーの上位に位置することになる。

ところがこのように既に作家として名声と地位を確立している人々に伍して、1925年現在で、やっと30才になるかならぬかの若い新進の作家達がそれぞれ特色のある作品を発表しているのが眼にとまる。若い人々の間で熱狂的に迎えられた *This Side of Paradise* を1920年に出版した F. S. Fitzgerald (1896-1940) は代表作となる *The Great Gatsby* をこの年に出版している。第一次大戦に取材した小説から、アメリカ社会そのものを主人公にする小説へと脱皮してゆく Dos Passos (1896—) は、ニュー・ヨークを描いた *Manhattan Transfer* を発表して、彼の代表作となる三部作の大作、*U.S.A.* (1930-36) への足場をかためている。また、パリーに住む G. Stein のもとに出入していた Ernest Hemingway (1899-1961) は新聞記者から作家へと成長する第一歩となる短篇集 *In Our Time* を出版している。

あくる年になると、これらの若い作家達の活躍は更にめだってくる。Hemingway は傑作 *The Sun Also Rises* を出版し、Fitzgerald は彼の中期のすぐれた短篇が多く収録されている *All the Sad Young Men* を出版し、Anderson に世話された William Faulkner (1897-1962) は処女小説 *Soldiers' Pay* を出版する。

このように、1925年は、大作家達が頂上をきわめて下りにかかり、若い作家達が頂上に迫ってくる年である。この年にみられる新旧二つの大きな流れは、極めて概括的に言えば、そのまま1920年代のアメリカ小説の展望であるといえる。巨大なもの、異常なものを追求した自然主義から、市民社会の写実的描写へ、地方的なものから都市へ、Genteel tradition への単なる反抗から露骨な性愛描写へ、平和な風俗画から死と暴力のオブセッションにとらわれた悲劇へ、そして、伝統的技法から実験的モダニズムをへて新しい技巧と文体の定着へと、20年代の

アメリカ小説は、技法、文体、素材、主題のあらゆる面で、大きな変化をみせていった。この変化の最先端にいたのが、先の、1925年当時30才になるかならぬかの若い作家たち、第一次大戦を身近に経験してきた戦後派の作家たち、——俗に「失われた世代」と呼ばれた小説家たちだった。

この「失われた世代 (the lost generation)」という呼び名は、パリーに滞在した Stein が Hemingway に向かって “You are all a lost generation.”¹⁾ と語ったことに由来する。

Hemingway がその後小説家になったため、「失われた世代」の作家達といえば、小説家を指すのが普通となった。けれども、当時 Hemingway のまわりにいた青年達は、まだ修業中の若い芸術家達だった。新聞記者もいたし、前衛的芸術雑誌（いわゆる little magazines — 後出の“1920年代の詩”参照）によって詩や短篇小説を試みたり、これ等の雑誌そのものの編集に従事する者、或は、他の芸術、劇、音楽、絵画に従事する者もいたし、文芸批評家もいた。更に、これ等の活動に於て、イギリス人、フランス人、ルーマニア人、ロシア人と交流する者も少くなかった。とにかく、彼等は年令的に近かったばかりでなく、芸術の追求という共通した目的を持ち、そのうえ、似かよった経験と生活を経てきた人々であって、文字通り、一つの世代を構成していた。彼等には非常にはっきりしたフォーミュラがあったのだった。

すなわち、彼等は、まず、1890年代に生れ、第一次大戦前後に成人した青年で、中西部の田舎に生れたものが多い。ハイティーンの頃に、文学への関心が芽生えると共に、自分を取りまいている、いわゆる「お上品な (genteel)」世界に倦怠し、故郷の彼方にあるものに憧れる。このような環境のもとで、第一次大戦をどちらかといえば、逃避の機会、あるいは倦怠のさなかの刺戟として受けとり、何等かの形で参加す

1) この言葉は Hemingway の *The Sun Also Rises* の扉に掲げてある。

る。ところが、軍隊に入り、戦場に出て残虐・不合理な現実に直面すると、深い懐疑に陥り、非人間的な軍隊機構に幻滅し、その上、大戦を支えていた理想や伝統的価値観にまで失望し、救い難い絶望を味う。終戦をほっとした気持で迎えるが、死と暴力の洗礼を受けた身には因襲的閉鎖的社会はたえ難く、アメリカの文化的風土に芸術の可能性はないと考えて、ヨーロッパで現地除隊するか、もしくは、帰国後再びヨーロッパに渡る。そして、自分達に直接訴える価値や意味を求め、因襲的社会或はその道徳の拘束を受けずに、ヨーロッパを旅行しパリーに滞在して、前述のように純粹芸術の追求に専心したのである。

外形的には、このフォーミュラは「故郷離脱——戦争参加——ヨーロッパ滞在——帰国」との形をとっているが、内面的には「故郷喪失——戦争による伝統的価値の拒否と幻滅感——審美的反逆及至は探索——アメリカの再評価」という意味がある。このフォーミュラの中で、個々の人生がそれぞれ独自の様式と意味をもち、個人がいずれも一つの例外であることを認めれば、広い意味での「失われた世代」の作家達として、次のような人々の名をあげることができる。

Harold Stearns (1891—1943)
 Sidney Howard (1891—1939)
 Archibald MacLeish (1892—)
 Dashiell Hammett (1894—1961)
 E. E. Cummings (1894—1962)
 D. O. Stewart (1894—)
 Edmund Wilson (1895—)
 E. J. Walsh (1895—)
 Robert McAlmon (1895—1956)
 J. H. Lawson (1895—)
 John Dos Passos (1896—)
 Louis Bromfield (1896—1956)
 F. S. Fitzgerald (1896—1940)
 William Faulkner (1897—1962)
 R. M. Coates (1897—)
 Harry S. Crosby (1898—1929)

Malcolm Cowley (1898—)

Ernest Hemingway (1899—1961)

Matthew Josephson (1899—)

この中には小説家ばかりでなく、後に詩人になった者も、劇作家になった者もいるし、作家として大成しなかった者も含まれている。更に、ジャーナリストの Harold Stearns をここに加えたのは、彼が若い芸術家のヨーロッパ滞在——Expatriation 或は Exile と通常呼ばれている——に一つの典型を示したからである。彼は1922年に、当時の中堅知識人33名を動員して、アメリカ文明批判論集 *Civilization in the United States* を出版した。執筆者には、極端な不平論者をさげ、アメリカ国籍を有する57才から27才、平均約36才の中間層を選んだ²⁾。ところがこの書物の数多くの論文が指摘したことは、科学を除いたあらゆる部門——文学、宗教、家庭生活、都市問題、教育、商業、社会道徳——に於ける失敗であった。Stearns はこのシンポジウムの結論として、アメリカ文明は才能を育てえない、マス化してゆくアメリカの文明そのものにアメリカに於ける才能の悲劇の責任があるのだ、という。そして、ヨーロッパでは少くともまだ自由があるし、生き方を知っている、精神的文化的支えとなる climate がある、として、1921年7月に、この書物の原稿を出版社に渡すとその足でヨーロッパに旅立ち、パリーを中心に11年間滞在した。

Stearns の行動が Expatriation の典型だといっても、彼の書物の寄稿者達全部が大挙して彼につづいてアメリカを立去ったのではない。彼等は自らの手で当時のアメリカをつくりあげてきた50代60代の世代の人々ほどの満足感と定着性はなかったにせよ、平均36才という年令から想像できるように、一応身分の保障、社会的地位を得ていた中間世代であって、アメリカの

2) 当時の文芸批評家の中では R. M. Lovett (1870—1956), John Macy (1877—1932), Garet Garrett (1878—1954), H.L. Mencken (1880—1956), V. Wyck Brooks (1886—1963), Louis Mumford (1895—) 等の名が見える。

文化的風土に不満を感じていても、すぐさまヨーロッパに向うほどの自由を持っていなかった。Stearns に続いて渡欧したのは、この執筆者の世代より、より一そう若く、それだけに社会的にも家庭的にも拘束されることの少ない人々、例えば、シカゴやグリニッチ村にたむろしていた若いモダニスト達、或は、戦争帰りの芸術青年たちだった。

アメリカ作家の殆んどは、一生に一度は必ずヨーロッパを訪れ、イギリスのみならず、フランス、イタリーなどに旅行し、ヨーロッパの伝統ある文化を自分の経験として確め、その芸術の雰囲気を楽しむのを常としてきた。中には再びアメリカに帰らなかった人も稀にはあったが、ほとんどの場合、ヨーロッパ訪問は単なる旅行だった。これに反して、1920年代のこの若い芸術家達の渡欧は、旅行ではなく、大挙しての「滞在」だった³⁾。勿論、そのような長期間の滞在を可能にしたのは、第一次大戦で疲労したヨーロッパの経済界で、ドルで生活することが有利であったためでもあるが、この若い世代には故郷としてのアメリカという意識がうすく、それがアメリカの文化的風土への大きな失望とヨーロッパ文化への憧憬に拍車をかけたといえる。

しかし、ヨーロッパに数年間滞在した人々は、この地でさえ自分達があとにしてきたアメリカに劣らないほどの知的、文化的不毛性があり、人間性を圧迫し、人間の可能性を萎縮させる機械の跋扈や、大量生産や画一化が勢力をのばしつつあることを知った。イタリアに行って

3) F. J. Hoffman の調査によれば、Expatriate 85名中5年以上滞在した者32名、2年から5年間の者が21名となっている。尚、この85名中、1915年以前にヨーロッパに渡った者11名、1915年—1920年 11名、1920年—1925年 34名、1925年—30年 25名がそれぞれヨーロッパに渡っている。また、1919年9月に1ドルは7.98フランであったのに、22年9月には12.84フランとなり、20年代の後半から32年まで大体25フラン前後となり、33年7月には20.02フラン34年7月には15.14フランへと下落した。

も、スイスに逃げても、ウィーンに行ってもこの種の頹廢があった。彼等は漸くヨーロッパに退屈し、改めてアメリカに眼を向けた。Stearns は30年代に入って帰国し、37年になってアメリカを再評価する *America: A Re-Appraisal* を編集した。Expatriation はアメリカの大恐慌以来経済的にも打撃をうけて、大体1932年頃までには終りをつげる。「失われた世代」の作家達も、大体、その頃までに帰国して、アメリカの現実と取組むことになる。

「失われた世代」の作家達がこの Expatriation の間に得た収穫は大きかった。彼等の大半は Stearns より以上に戦争の影響を強く受け、より強く伝統的諸価値の拘束を拒否した。それだけにより感情的に不安定でもあった。「絶望」或は「虚無」といった言葉は、この若い世代の作家たちの流行語だった。しかし、彼等は決して絶望に身をゆだねて無為の日々を過ごしたわけではない。Lost Generation の lost とは、単なる「喪失」や「幻滅」を意味するのではなく、信じるに値する新しい価値を求め、行動の規範をさぐる焦燥感と不安にみちた模索、否定のどん底から出発した探求をも意味している。Arthur Mizener の言葉をかりると「総ての地図が役立たないため自ら新天地を探索せざるをえない、という意味で、この世代は lost だった」。⁴⁾ この、いわば、道に迷って模索中の世代にとって、古い神にとって代り、一切の意味と刺戟を与えてくれたのが、純粹芸術の追究だった。彼等にとって Expatriation は、先に一言のべたように、審美的反逆、審美的探索という含みがあったのである。

彼等がこの Expatriation の間に学んだことを要約するのは容易でない。指導してくれる先輩 (Ford, Stein, Pound 等) に事は欠かなかったし、意欲的作品を発表する場 (little mag-

4) Arthur Mizener, "The 'Lost Generation'," *A Time of Harvest; American literature 1910-1960*, ed. R. E. Spiller (New York: Hill and Wang, 1962), p. 74.

azines 等) もあった。語り合い、批判し合う仲間もいた。また、国際的芸術活動だった Dadaism, Surrealism, Expressionism, 抽象芸術, 現代音楽などの運動にも加わり、精神分析、民族学、人類学などの研究にもとづく新しい文学の方法と様式を試み、「意識の流れ」の技法をとり入れ、新しい散文のスタイルを様々に実験することもできた。とにかく、あらゆる新しさを求める可能性が彼等の前に開けていた。文学修業の面で、彼等ほどめぐまれた世代は他にない。

更に、先輩作家達からは自分の知っているものを描けとの指導を受けていたが、彼等は今まで試みられなかった新しい素材を豊富にもっていた。自分達が生々しく経験した近代的戦争や混乱した戦後社会、或はそこに生きる新しい生き方、或は自分達の Expatriation そのものに、小説の素材はいくらでもあった。

なかでも、戦争がこの作家達の小説に好個の素材を与えたことはいうまでもない。彼等は自分達の生々しい経験を描き、自分達の身体に傷となって残った戦争の恐るべき影響を刻明に語った。彼等の戦争嫌悪、理想と希望の喪失に裏付けられた幻滅感、彼等の先輩達の戦争を扱った作品とおよそ異質的な戦争小説を生んだ。

例えば、Edith Wharton の *The Marne* (1918), *A Son at the Front* (1923), 或は Willa Cather の *One of Ours* (1922) などの一群と、Dos Passos の *One Man's Initiation: 1917* (1920), *Three Soldiers* (1921), 後に詩人となった e.e. cummings の *The Enormous Room* (1922), 戦争小説で名をうった Thomas Boyd (1898—1935) の *Through the Wheat* (1923), William Faulkner の *Soldiers' Pay* (1926), 更に Hemingway の *A Farewell to Arms* (1929) などの作品を並べてみれば、この二つの作品群がいかに隔絶した世界に属しているかはあきらかである。一例をあげれば、1923年にピューリッツァー賞を受賞した Willa Cather の *One of Ours* には、なるほど喪失感を抱いた人物が登場するが、彼の幻滅は自分の農場生

活に根ざしたものであり、戦争はその幻滅観の捨て場にすぎない。また、作品全体の戦争に対する態度は、はなはだナイーブで、ロマンチックですらある。これに対し、三人の兵隊の生き方を描いた Dos Passos の *Three Soldiers* では、Cather の作品と似たような状況を扱ってはいるが、教育も、職業も、軍隊に入った動機もそれぞれ異なる Fusselli, Chrisfield, Andrews の三人が、軍隊という非人間的な機構と、戦争という不合理な出来事を通して、共に、希望と可能性を失って失敗への道を歩む姿が、生々しく描かれている。むろん、この三人の失敗者の姿の背後には、人間の能力をも破壊する戦争に対する強い嫌悪感が流れている。

このへだたりを生み出したものは、自ら死と暴力の恐怖をくぐり抜け、非情の洗礼をうけたことに由来する、根本的な価値のノームの相違である。また、軍隊という機構の中で自由と孤独の価値を、抽象観念としてではなく、体験としてかみしめた人生観の相違でもある。戦場には故郷で教えられていた価値と全く異なる価値があった。この世代のひとびとは、未来をなりゆきにまかせる無責任さを学び、節制、慎重、謹厳などの美德が、戦場では何の役にもたないことをも知った。生命の危険は退屈からの解放、感能的刺戟であり、恐怖はとぎすまされた感覚のよろこびだった。そして、一切の伝統的価値は全く空虚なものと感じられるようになってしまった。Dos Passos の *One Man's Initiation: 1917* (1920) の Martin Howe が苦しみ抜いて得たのと殆んど同じ認識を、Hemingway の *A Farewell to Arms* (1929) の Frederick Henry は次のように極めて適切に言っている。

「私はいつも神聖だとか、栄光だとか、犠牲だとか、益もない表現に当惑する。……私は神聖なんてものは見たこともないし、栄光といわれるものは何等栄光ではなかった。シカゴの屠殺場で肉を何もせず埋めるとすれば、犠牲なんてのは、そんな屠殺場のようなものだ。聞くにしのびない言葉が沢山あるので、威厳のある

のは、ただもう地名位のものだ。……栄光、名栄、勇気、神聖などの抽象的な言葉は、村の名、道路の番号、河の名、連隊番号、年月日などの具体的なものと並べてみるとけがらわしくなる」⁵⁾

これは余りにも有名な言葉だが、抽象的な言葉によって支えられていた伝統的価値を、これほど根本的に拒否した言葉は外はない。

戦争という異常な経験をへてきた人は、失われた世代の作家達自身がそうであったように、一種の性格改造者となり、二度とふたたび故郷の因襲の中にもどって安住することはできなかった。Hemingway のいくつかの短篇にも、Faulkner の *Sartoris* (1929) にも、このテーマのヴァリエーションが描かれている。戦傷を負った人々の問題も屢々とりあげられ、Faulkner の処女小説 *Soldiers' Pay* (1926) では、ほとんど廃人となって帰還した Mahon をめぐる人々が描かれ、Hemingway の *The Sun Also Rises* (1926) の主人公 Jake Barnes も、戦傷によって性的不能になった人物である。

これ等の戦争小説には、南北戦争などに取材した戦争小説を1890年代に書いた Stephen Crane (1871—1899) の影響が決してないわけではない。しかし、この若い世代の戦争を見る眼は、はるかにリアルで、きびしく、素材としての自己の経験にドライな忠実さを保ち、素材が要求する技巧——決して装飾的、誇張的でない技巧——に意識的でもあった。この芸術的厳しさと洗練は、もちろん、Expatriation の間の修業によって学びとられたものである。

ヨーロッパに群がった青年達、即ち、expatriate たちの生活態度を描き、失われた世代の特色をよく描いた小説は、上に言及した Hemingway の *The Sun Also Rises* と、1934年になって発表された Fitzgerald の *Tender is the Night* である。*The Sun Also Rises* では Jake とその恋人 Bret Ashley をとりまく ex-

patriate たちの群像が、パリーやスペインを舞台にして描かれる。戦傷による性的不能のため、Jake の恋は動物的愛にすらも展開せず、Bret は男を漁り、Jake ははげ口のない不眠症に悩まされる。二人は共に、自分自身の内部にあるこの破壊作用と戦わねばならない。しかし、その戦いを生きぬくためには、冷静な頭脳、確固とした意志、芸術家の節度が必要である。これらがなくては、生活は瞬間への衝動に流されてしまう。ここに、いかなる事態にいたっても単純に、具体的に考え、冷静沈着に行動し節度を保つことの必要が、一種の ritual として厳しく要求される。Hemingway のほとんどの作品がこの ritual を描いているのに反し、Fitzgerald の *Tender is the Night* では、次第にこの ritual を守りえなくなり、感情的不安定、性格の破綻といった失われた世代の脆い一面をあらわしてくる Dick Diver が描かれている。

軍人にはなったが戦場経験をもたなかった Fitzgerald は、20年代の初期からアメリカの世相を描いてきた。彼はこの時代の代弁者の観があった。しかし、20年代の派手な世相を描き、伝統的モラルにしばられない若い世代の生態を描いた作品は、他にも沢山ある。例えば、Ben Hecht (1893—) の *Erik Dorn* (1921)、Floyd Dell (1887—) の *The Moon-Calf* (1920)、後に詩人となった Stephen Vincent Benét (1898—1943) の *The Beginning of Wisdom* (1921)、Stein の agent をしていた Carl Van Vechten (1880—) の *Parties* (1930) などをあげることができよう。これ等の作品は、Fitzgerald の長篇、短篇と同じく、きらびやかな世相を描きながらも、20年代の繁栄の背後にある暗いかげ、例えば、Sacco と Vanzetti の事件が象徴するような情緒的不安定、ジャズ流行の背後にある静寂と孤独に耐えられない落着なさ、価値の体系を失った空虚感をも描いた。彼等はいずれも時代の陽気さ、快樂主義に表面的には和しながらも、その裏面の暗さ、空しさをじっと見つめていたのだ。

5) Ernest Hemingway, *A Farewell to Arms*, Bk III, Chap. 27.

J.W. Krutch の *The Modern Temper* はこの暗さから生れた評論だが、きらびやかさの背後に迫る暗いかげを、特にたくみにとらえた小説は、Fitzgerald の代表作 *The Great Gatsby* (1925) である。かつての恋人をとりもどそうとする空しい夢に生きた Gatsby の、途方もないとしか形容できない生涯とその破滅は、現代の精神的不毛性を象徴し、来るべき好景気の終焉を予言するかの如く空虚だった。これらの20年代を描いた作品は、恐らく著者達自身は意識しなかったかもしれないが、1929年にはじまる大恐慌が必ずしも経済だけの問題ではなくて、社会そのものの情緒的不安定、落着なさを、空虚感と密接にむすびついていたことを示している。Fitzgerald はあるエッセイのなかで、1927年に既にノイローゼがアメリカに蔓延していたと指摘し、数多くの暴力沙汰や自殺行為が起ったのは、決して恐慌の結果ではなく、ブームのさなかのことだったと書いている。⁶⁾ このポキッと折れるようなもろさは、失われた世代の作家達自身の一部にもあった。Harry Crosby はパリーから帰って自殺し、Fitzgerald は精神的に崩壊した。詩人 Hart Crane (1899—1932) の自殺も、若い世代の情緒的崩壊の一例だった。

20年代の青年達にとって Fitzgerald が身近く感じられたのに反し、一般市民にとって人気があったのは Sinclair Lewis だった。*Main Street* (1920) にはじまり、*Babbitt* (1922), *Arrowsmith* (1925), *Elmer Gantry* (1927) と続いた Lewis の作品は、20年代を通じて常にベスト・セラーの上位にあった。それは、必ずしも彼の作品が芸術的にすぐれていたことを意味するのではなく、彼がアメリカの伝統的俗物根性、地方社会の閉鎖的モラルを、外側からではあるがたくみにとらえて、極めて単純な諷刺の形で表現したからに外ならない。1930年に彼は

ノーベル文学賞を受けた。彼の受賞には、国内での人気が大きく買われたことも事実だし、20年代に世界経済の中心になり、世界最強国の一つになったアメリカへの関心や、H.L. Menck (1880—1956) の *American Language* (1919, 改訂版 '21, '23, '36) などによって強く意識されてきたアメリカ英語への興味もあつたに違いない。しかしその一方では、続々とすぐれた作品を発表してきた失われた世代の人々を中心とする若い有望な作家達に、Lewis が、年令的に一番近い先輩作家であったことも重要な事実だった。ノーベル賞受賞演説のなかで Lewis は、アメリカに於ける作家の地位について語ったあと、自分に続く若い作家達に言及して、「彼等の大部分は現在まだパリーに住んでいる。彼等の大部分は Joyce の伝統を追っていきさか気違いじみてはいるが、いかに気違いじみていようとも、彼等はお上品になることも、因襲的になることも、退屈な本を書くことも拒否してきた。私は彼等に敬意を表する…」⁷⁾ と結び、アメリカ文学の新しい動きをになつていける若い世代の作家達に期待をよせた。

20年代の終りまでに、Hemingway は既にハード・ボイルドと呼ばれる、直線的簡潔を本質とする口語的文体を駆使した非情の世界をつくりあげていたし、Faulkner は1929年の *The Sound and the Fury* で、作品上の時間を複雑に操作し、「意識の流れ」をとらえる語句の断片を連ねたかと思うと、長い錯綜した文章をあやつったりして技巧をこらし、人生の連続性、不連続性を追求していた。そして、南部を舞台にして、現代人の精神的課題に通じるテーマを開拓してゆく。一方、Dos Passos は初期の戦争の犠牲者を描くことから、アメリカの社会的経済の流れを、その代弁者、犠牲者を包括してとらえる方向に向っていた。彼の努力はやが

6) Cf. F. S. Fitzgerald, "Echoes of the Jazz Age," *The Crack-Up*, ed. Edmund Wilson ("New Directions Paperback," New York, 1956)

7) Sinclair Lewis, "The American Fear of Literature (Nobel Prize Address)," *The Man From Main Street*, ed. H. E. Maule and M. H. Cane (New York: Random House, 1952), p. 17.

て、*The 42nd Parallel* (1930) にはじまり、*1919* (1932)、*The Big Money* (1936) と続く三部作 *U.S.A.* に結晶する。この作品の「意識の流れ」をとり入れた “camera eye,” 或は、新聞の見出しを連ねた “news reel” などの形式は、他の作家たちの技法と共に、いずれも、expatriation を中心とするこの時代の修業の産物だった。

20年代の終り近くになって、「失われた世代」の小説家達が続々と代表作、傑作を発表しはじめた頃から、彼等とは異質的な作品が少しずつあらわれてきた。1928年には、劇作家として有名になる Thornton Wilder (1897—) の小説 *The Bridge of San Luis Rey* (1927) がベスト・セラーのトップに立ったし、1929年には、Thomas Wolfe (1900—1938) の処女小説 *Look Homeward, Angel* が出版され、新しい小説の動きの口火を切っている。Wolfe はやがて、20世紀の最初の10年間に生れ、第一次大戦を少年期のうちに迎えた他の作家達、例えば、John Steinbeck (1902—), Erskine Caldwell (1903—) J.T. Farrell (1904—), W. Saroyan (1908—) などと共に、30年代の代表的小説家となっていく。30年代には小

説と社会がより密接に結びつき、再び自然主義が抬頭する。そして作家は何等かの形で政治と対決せざるを得なくなり、20年代に台頭した作家たちでも Hemingway や Dos Passos をはじめ、批評家の Malcolm Cowley, Edmund Wilson ですら、芸術のみをひたすら求めた20年代の姿とは異った姿勢をとっていく。

それにしても、現代アメリカ小説が、20年代の「失われた世代」の小説家たちの洗練された技法と現実をみつめる鋭い洞察によって確立されたことは、否定できない事実である。現在、世界の文学界にしめるアメリカ小説の高い位置もまた、この作家達によって礎かれたものである。この世代の作家達の中から、その後二人のノーベル賞受賞者 (1950年 Faulkner, 1954年 Hemingway) が出たことは、まだ人々の記憶に新しいことである。個々の作家、作品の評価は、とうていこのような小論で論じつくされるものではないが、Hemingway のいくつかの短篇や、Faulkner の *The Sound and the Fury*, 或は Dos Passos の *U.S.A.* などは、アメリカ小説史上の輝かしい成果として、末永く、高く評価されることであろう。 (1963. 3. 4.)

Something had changed, and the exiles of the 1920s had played their part in changing it. They had produced no Dostoevski, but for this simpler task no genius was required; they had merely to travel, compare, evaluate and honestly record what they saw. In the midst of this process the burden of inferiority somehow disappeared — it was not so much dropped as it leaked away like sand from a bag carried on the shoulder — suddenly it was gone and nobody noticed the difference. Nobody even felt the need for inventing an American god, a myth to replace that of the businessman; instead the exiles invented the international myth of the Lost Generation.

Malcolm Cowley: *Exile's Return*